ぽけっとすとーりー　～小さな国の、小さな小さな物語～

「……で？　今なんつったよ？」

　眼前に広がる青い海と広い空。そして輝く夏の太陽の下を吹き抜ける風の中。

　星川太一は、自分の目と耳を疑っていた。

　まあ、無理もないだろう。自分の友人が突然変なことを言い出したと思ったら、姿が突然変わってしまった……いや、こう言うべきか。変身したからだ。

　彼の目の前にいるのは、少年。だが、その容姿は特筆に値する程に奇抜極まりない。端整な目鼻立ちを覆う赤い髪の毛だけでも珍しいのに、それが地面スレスレまで伸びているのだ。こんな人間、世界中を探した所でそうは見つからないだろう。

「だーかーらー」

　その少年は、そう言ってニッコリと笑い、

「僕、今日からポケモンバトルする時は、この格好でバトルするから」

　もう一度、同じことを言った。

　何とかしてくれ、という意味を込めて、ちらりと横を見る太一。そこには、そんな二人のやり取りをただただニヤニヤしながら見ている少年達の姿があった。

　拓馬、良助、神楽。

　いずれも、二人の友人だ。しかしどうやら、太一を助けてくれる様子は無い。

「……おう、分かった」

　太一はそう呟いて、キャンプボーイキャップをかぶり直す。そして、辺りを見回した。

　現在、五人がいるのは『葉桜フェリー乗り場』という船着き場。夏休みの一週目ではあるが、これから五人は、とある場所で二泊三日の旅行に行く……とでも言えばいいのだろうか？　とにかく、そんな予定なのだ。

　本来なら、ここには合宿、それも去年と違い、今回は太一と神楽を含めて、嶺川家の別荘に行く予定が入っているのだが、アクシデントがあって急遽日程を変更することになったのだ。

まあそれは置いておいて。

今ここには、五人以外の人はいない。前後左右、はては上下も確認した太一は、よし、と言うように頷いた。慣れた手つきで自分の腰の後ろに手を回すと、そこについたボールホルダーからネットボールを取り出し、投げる。

出てきたのはヌマクロー。ミズゴロウの進化系だ。

目の前にいるその少年が、何をするのだろう、とでも言わんばかりに頭の上に『？』マークを浮かべていると、太一は徐に彼に指を向け、口を開いて次のように指示を出した。

「水鉄砲」

「……っ？」

　途端、勢いよく発射された水流を顔面一杯に受けた赤髪の少年は、声を上げる間もなく蹌踉めき、思わず尻餅を着いてしまった。

　そこでようやく水の攻撃から開放され、ゲホゲホと体に入った水を吐き出す。

「な……何すんのさっ？」

　ひと仕事し終えた、とでも言うように満足気な表情をしている太一に、彼がそう文句を言ってしまったのも無理無い話である。

　だが、太一はそれを聞くと半眼を向いた。

「何って……テメーが夏の暑さでおかしくなっているようだから、親切に水ぶっかけてやったんじゃねーか。感謝されることはあっても、文句を言われる筋合いは無え」

「別におかしくなんてなってないし！」

「あぁん？」

　ヌマクローをボールに戻そうとする手を、ピタリと止める太一。

「つーことはあれか？　まだいう気かテメーはよ」

「ああ！　何度でも言うさ！」

　そう言い切った彼に、太一は思わず溜息を吐く。

「ああ、そうかい……まだ頭ん中湧き上がってるみてーだな！　もう一発行くぞ、ヌマクロー、水鉄砲！」

　だが、今度は赤髪の少年も予想していたのか、ヌマクローの口から吐き出された水流をひょいと躱す。大した動きではなく、寧ろ彼のその動きは普通だったのだが、何故か太一はイラっときてしまった。

　多分あれだろう。避けた際になびいた、あの真夏に見るには鬱陶しい程の量の赤い髪の毛がそうさせるのだろう。見ているだけで暑くなってくる。目に毒とはこのことだ。

　そう結論づけて、太一は再び指示を出そうと口を開いた。だが――

「はいはい――そこまでにしておきなよ、二人共」

　その声と共に、ボフンと何かで頭を叩かれて、太一は指示を中断させらてしまった。

　振り向いた先には、呆れ顔を浮かべた拓馬が、持っている本で、もう片方の手にポンポンとさせていた。どうやら太一は、あれに叩かれたようだ。

「人いねーからいいだろう？」

　一応、太一も気を配っておいたのだ。周りに人がいれば、万が一の被害を考えて、攻撃はやめるつもりだった。

　まあその場合は、友人を小一時間程正座させて説教するつもりだったのだが……なんだか理不尽な気がして、太一は一個年が上の拓馬に、少し怒気を強めてしまった。

「そういう問題じゃ無いよ……むやみやたらとポケモンに人を攻撃させちゃ駄目でしょ？」

　だが、そんな太一を気にする風も無く、拓馬も溜息を吐いてそう言った。

　一応日は浅いが、太一もそのポケモンも修業中の身である。彼が思っている以上に、彼のポケモンの攻撃は強力なのだ。

「そうだよ太一。人に向けてポケモンの技を使っちゃいけないんだぞ？　いーけないんだ、いけないんだ。竜平さんに言ってやろ♪」

「まてゴラ！　元はといえばテメーがふざけたことぬかしやがるからだろーが！」

　赤髪の少年の言い草に、青筋を立てて声を張り上げる太一。だが、内心結構ビクビクしてしまったのは、本人の名誉のためにも内緒にしておいてやるべきであろう。

　だがしかし。そのせいであろうか。

　決して言ってはならない一言を、彼は口走ってしまった。

「だいたい、そんな格好してバトルするとかどういうつもりだ、雅也！」

　そう。目の前にいる赤髪の少年は、雅也がフーディンの力を借りて変身した姿なのだ。だが、

「ぶー！　ちーがーうー！」

　そう言って、頬を膨らませて、両腕を頭上で大きくバッテンにした彼に、近くで二人のやりとりを見ていた拓馬と良助はしまった、というような顔をする。

　はて何だろうと思った太一だったが、すぐにその理由を知ることとなる。

「この姿の僕を呼ぶ時は！　雅也じゃなくて……ロラン、って呼んでくれよなっ！」

　それを聞いた太一の心情は、こうだろう。

　ちょーウゼー。

「普通に『雅也』のままでいいじゃねーか！　何で変える必要があんだよ！」

「ダーメーなーのー！　この姿の時は、そう呼ばなきゃダメなの！」

　雅也……もといロランは、そう叫んだ。

　何故彼はこんな格好をしているのだろうという疑問は、一応雅也は、自分のポケモン以外の皆にはこう言ってある。

『この姿でいる方が、テンション上がってバトルに勝てそう』

聞いた皆は反応に困ったものの、確かに数値の上では勝率が上がっているので、止めるに止めさせられないのだ。別にフーディンがこっそりアシストしている気配は無いし、まあいいか、と言うことになった。

まあ勿論、『皆には』とわざわざ強調したのは、他にも理由はあるからなのだが。

「おい、テメーらも何とか言ってくれ！」

　だんだん相手にするのが億劫になってきたのだろう。太一は未だ言葉を発さない友に助けを求めた。

「ん？　そうか？　格好良い気もするから、別に俺はそれでもいいと思うんだけどな」

「僕も同じかなぁ。バトルするのに何とも無ければ、雅也の好きにしていいと思うよ？」

　だが、良助と神楽はそう言って、太一的には何とも腹立たしいことに雅也の肩を持ってしまったのだ。グヌヌと奥歯を噛み締める太一。フラストレーションは、既に限界ギリギリだった。

　本来、ポケモンバトルとは厳格に定められたルールの中で、真剣に自分の実力をぶつけ合う場所だと太一は考えている。いや正確に言うと、彼が漠然と感じているポケモンバトルへの思いを、何か格好良く言ってみるとこんな風に表せるわけで、本人が今の思いをはっきりと口に出したわけではないのだが。

　それはそれとして、つまり何が言いたいかと言うと。

　ポケモンバトルをするのに、本当の顔を相手に見せないとは何事か。

　というようなことを太一は言いたいのだ。

　取り敢えずそこんところを、湧き上がる思いに任せて今一度説明してやろうと太一が口を開きかけた、その時だった。

　ブォォォォ！

　そんな汽笛と共に、白いフェリーが波を掻き分けこっちに来るのが見えて、本日二度目ではあるが、止むを得ず太一の発言は中止させられることとなる。

　とは言え、あまり本人は気にしてはいない。

というより、他の方に気が向いていた。他の皆も同じだ。ロランもいつの間にか、変身を解いて雅也に戻っていた。

　五人は、ゴクリと唾を飲み干し、思い思いの表情を浮かべる。だが全員に共通しているのは、どこか不安そうな色を見せていることだろう。まあ無理もない。

ご覧の通り、大人の姿は無い。これから行く所にも、知っている人は誰一人としていないのだ。いくら旅行とは言え、小学生だけ。そんな気持ちになるのも当然と言える。

二泊三日の旅行に、何故田島辰巳を筆頭とした大人達が誰もいないのか。

　事の始まりは、夏休み初日の今日から数えて三日前のことだ。